



NEWS LETTER

協創

since 2016
第 14 号
2024.10.28

新潟大学 教職大学院



科目名「合同課題研究」

自分を耕し育てる時間 新潟大学大学院教育実践学研究科 研究科長 高木幸子

秋の風を感じる季節になりました。教育学部では改修工事が進んでおり、工事の終わった大きい講義室には色とりどりの椅子が並んでいます。また、建物の外壁もきれいになり、周りの木々と美しいコントラストを見せています。

本教職大学院は、平成28（2016）年度の創設時より、学部卒業生・現職教員の教員養成・育成の役割を果たすべく理論と実践の往還を中軸に教育課程を編成し進めてきました。院生の皆さんは、自身の問題意識に基づいて実習に取り組む過程で、考える面白さを味わったり、新たな視点を得られたりしていますか。

今年度、新潟大学は創立75周年を迎えます。本教職大学院も令和7年度に10周年を迎えます。今年度の「教育実践研究会（通称：結絆の会）」は、12月14日に開催される予定です。修了2年目の皆さんには企画・運営等で大変お世話になりますが、今

年度もどうぞよろしくお願いいたします。大学院での学びを生かして勤務地で取り組んでいる修了生の取り組みを伺うだけでなく修了年度を越えて語り合える機会です。

大学院は2年間という短い時間ですが、探究した成果や新たな気づきが修了後もそれぞれの取り組みの中で育てられることを祈念しています。



授業紹介

第1領域の紹介

担当教員 高木幸子・高橋恒彦・田代孝・宮藺衛

本講義は、学校における教育課程の編成やカリキュラム・マネジメントの理論と実践について、また特色ある教育課程の事例について研究・分析を行っています。

前期は、教育課程の編成やカリキュラム・マネジメントの視点から、学習指導要領に基づく教育課程の各編成要素（各教科、道徳、特別活動、外国語活動、総合的な学習の時間）の目標や内容、編成要素間の相互関連の望ましいあり方や評価等について、具体的な諸事例を基に理論と実践を繋いで学びを深めていくことを目指します。

授業では、教育課程編成の根拠となる学習指導要領の法的な位置付けや関連する法令等の理解、学習指導要領の歴史の変遷、教育課程の意義、教育課程編成の手順・方法、カリキュラム・マネ

ジメントの概念等について、自校の教育課程などと関連させて学びを深めていきます。学習指導要領の改訂や中教審答申を踏まえて、教科等の学びにおける資質・能力の育成はもとより、教科等横断的な視点に立った汎用的な資質・能力を育むための教育課程、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に向けた教育課程のあり方についても考究していきます。

後期は、地域や子ども達の実態等を踏まえて、特色ある教育課程を編成して取り組んでいる事例に着目します。その教育課程編成のねらいや内容、具体的な取組について研究・分析を行い、その成果を基礎として地域的特性や教育課題を踏まえた、特色ある教育課程の編成・実践・評価・改善のあり方を理解し実践する力量を身につけていくことを目指します。

選択 学校評価

担当教員 雲尾周・酒井悟

学校評価については、平成14年4月に施行された小学校設置基準等において、各学校は自己評価の実施とその結果の公表に努めることとされ、保護者等に対する情報提供について、積極的に行うこととされています。学校評価は、児童生徒がより良い教育活動等を享受できるよう学校運営の改善と発展を目指すための取組と整理するために行われています。

本講義は、後期選択科目として隔週金曜日の3・4限、計8日で開講しています。この講義では、次の2つを学びの軸としています。

- ① 学校評価の取組を俯瞰した視点から知る
- ② 学校評価実用化に向けて考える

①の学びとして、幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等

学校から管理職を講師として招き、校種ごとの学校評価について講義を受けます。校種や学校による学校評価の相違点について気付く機会となっています。また、教育委員会からの講義により、行政区の教育活動の把握と改善に向けた取組がされていることを知る機会となります。この講義によって、学校評価が、目的・計画的に実施されることで、教育活動の充実が図られることを理解します。

②の学びとして、講義や講師の話を参考にしながら、自校の学校評価をさらに改善し実用することを想定して、課題と改善策について、受講生同士で検討し合いながら精度を高めていきます。

必修第1領域の教育課程での学びと関連付けて考えることで、実用的な学校評価の運用に向けて理解を深めていきます。

授業風景

1 課題研究

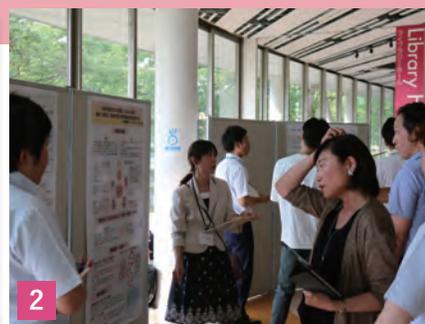
院生の研究をチームで検討



1

2 合同課題研究

院生の研究発表と批正会



2

3 協働的な学び

対話を通して学びを深める授業



3

4 フィールドワーク

教育施設を巡り知見を広げる授業



4

にいがた教育フォーラム2024

令和6年（新潟大学創立75周年を迎えました）8月3日（土）、
「新しい時代の教育実践の構築に向けて」をテーマに、恒例の
「にいがた教育フォーラム」を「NITS・教職大学院・教育委員会等
コラボ研修プログラム支援事業」の後援も得て開催致しました。

専任教員が主催する9つのワークショップと、院生9名からの話
題提供をもとにしたラウンドテーブル（コーディネーター：本学
院生が担当）の二部構成で実施しました。214名（教職員159名、
一般8名、大学生・院生47名）の方々に参加頂き、事後アンケート
での評価もとても良好（大変よかった：34.5%、良かった：65.5
%）な回答が得られました。

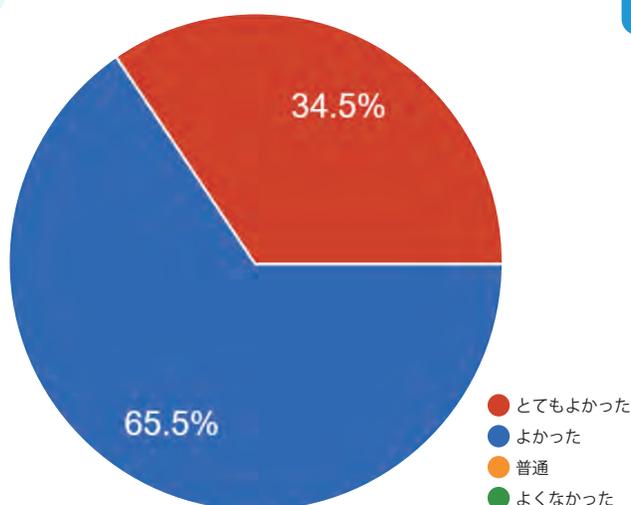
私が担当したワークショップ「小学校体育ボール運動領域の授業
づくりについて考えよう！」では、「ルールの簡易化」を切口に3
名の講師から話題提供、その後小グループに分かれてのワークと進
められた。「複数の授業実践を聞くことができ勉強になった」等、
好意的な回答を頂きました。

今後は、さらにより良い研修となるよう、開催時期や開催方法
なども含めて、皆様から頂いた意見を参考に検討して参ります。

大庭昌昭

質問：今回の「にいがた教育フォーラム」全体の満足度はいかがでしたか。

参加者の声(一部)



- ・私のように他県からも参加することができるので助かります。
- ・様々な経験豊富な先生方に話を聞けてとても為になりました。
- ・大学院の先生によるワークショップでは、1つのテーマのなかでも様々な視点から考えることができました。
- ・大学院の先生からお話を聞くだけでなく現場の先生方のお話も聞くことができ、気づきと学びがありました。
- ・参加したワークショップ、ラウンドテーブル以外にも魅力的なテーマばかりで、すべてに参加したいと感じました。

フォーラム第2部では9のラウンドテーブルを設定し、2年次院生
現職・ストマスの方々の研究紹介・話題提供をさせていただきました。
1年次院生が主体となり運営を進め、開催に向けての準備
やラウンドテーブルの持ち方の協議を行いました。

ラウンドテーブル開催の趣旨は、2つあります。一つは、発表者
が自分の研究について参会者から批評を得ることを通して、研究
の目的・方法・進捗を明確にし、今後の見通しを考える機会とす
ることです。もう一つは、運営者が主体となって運営することで
院生の協働性を高めること、そしてラウンドテーブルを研修とし
てデザインし経営することで、運営能力を高めることです。発表
者と運営者の立場である両輪が機能する研修体制に、院生として
の「学びのロールモデル」の姿が表れていると考えます。

ラウンドテーブルは、主に2年次院生現職・ストマスの方々の研究
紹介・話題提供でした。教科研究から学校運営まで幅広くあり、教
職大学院の魅力の一つである課題意識における「多様性」を感じ
ました。それぞれの発表者が学校現場で感じている教育課題を解
決するための手立てを考えた実践を話題提供してくださいました。
教職大学院の講義で得た知識と自身の問題意識が合わさった実践
には、これからの教育の質を高める可能性を感じるものがたくさ

んありました。自分の研究を学校現場に還元し、社会に開く姿は院
生にとっての「学びのロールモデル」であり、教職大学院で学ぶ意
義を改めて見だすことができました。

今回のラウンドテーブルから、研究を発信する・研究への批評を
得る・研究をもとに学校現場と実践の共有を図るなど、参会者との
研修を自分の目的に応じてデザインすることができる可能性を感じ
ました。ラウンドテーブルに臨む院生の目的を明らかにし、参会者
の学習ニーズを探りつつ、院生主体の運営を充実させていくこと
が、教職大学院での学びを深めることに繋がると感じました。課
題研究・フォーラムなどについて、教職大学院のカリキュラムに
おける位置付けや意味付けを理解し、学
校現場と課題研究の往還を図りながら、
自己の課題解決を行うことができる2年
間の研究生活をデザインしていきたいで
す。

1年次院生現職 在籍校阿賀野市立水原小学校
山崎翔泰



授業紹介

僕の問題意識と研究

担当教員 相庭和彦

僕は1983年埼玉大学卒業論文以来、1990年東京大学大学院博士課程満期退学まで教育研究を2つの方向からアプローチしてきた。一つは歴史的視点であり、もう一つが差別論的視点である。学部・大学院時代には教育学研究に「権力を批判的にとらえる方法」が残っていたため、僕もその影響を大きく受けてきた。研究分野は主に女性教育政策史、農民運動史と教育政策、市民社会と教育政策であった。

1990年新潟大学に職を得て以来、「生涯教育政策、生涯学習と成人教育」分野に軸足が移動し、地域教育論と生涯学習の関係性を研究してきた。その中で教育を学校教育に限定するのではなく、伝統文化や社会の教育力というやや捉えどころのない教育力に関心を持ちつつ、地域教育改革と生涯学習、戦後教育政策と生涯学習、現代市民社会と生涯学習、伝統文化と生涯学習という4主題で研究をまとめてきた。

現在は伝統文化研究の延長でグローバリゼーションと生涯学習の関係に関心が移っている。現代東アジアの激変のさなか、多くの日本人が「内向き志向」を強め、将来の日本社会の在り方を展望できずにいるように僕には見える。戦後高度経済成長期以来、「バブル経済」とその崩壊を経験した私たち日本人は「失われた30年」をへて、世界史の流れから取り残されている。だがその現実を見つめることなく「昭和の成功体験」の歴史に自己投影し、「今を納得している」のではないか。グローバリゼーションを生涯学習の視点から検討していく中でこのような問題意識が強くなった。現在この問題を解いていく手掛かりに戦後日本人の主権者認識の形成過程を検討している。「親ガチャ」「ヤングケアラー」「自己責任」などの言葉の背後にある「政治的なもの」と「教育実践研究」の「乖離」を検討するのが僕の研究の現在である。



「学びを深める」ことが「楽しい」と実感できた2年間

新潟大学教職大学院 令和5年度修了生（新潟県立西蒲高等特別支援学校） 倉田彩子

教職大学院に入学する前の私は、目の前のことに追われる毎日、改善したいことがあっても、どこに問題点や課題があるのかを見極め、それをどう改革したらよいか分からず、行動に移すこともできずにいました。問題点や課題に迫り、改善に向けて行動できるようになりたいと思うようになり、教職大学院への入学を決め、自己理解をテーマに研究をしてきました。テーマに迫る中で、単に知識を得るだけでなく、自分を見つめたり、先生方や他の院生と意見を交わしたりしていくことで見えなかったものが“見えた”“分かった”と感ずることがたくさんありました。資格や指導法の習得は独学でもできますが、テーマに迫る中で、知識や技能と照らし合わせて熟考し、“見えた”“分かった”と感ず、それを実践しながら確かめていくという学びは、自分一人では成し得なかったと思います。このように教職大学院では、「学びを深める」ことができたと思感することがたくさんありました。



そしてこの学びは、現任校で生かされていると感じます。特別支援学校はTTで授業を行うことが多くあり、自分だけでなく共同で授業を行う先生方と意見交換をしながら、子供の成長に向かって取り組むことが多くあります。どこに問題点や課題があるのかを先生方と対話の中で見だし、解決に向けて取り組んでいく。その過程の中には、教職大学院で培った見えなかったものが“見えた”“分かった”という経験と、広く学んだ知識からヒントを得て、対話から最適解や方向性を見出すことができていると感じます。

答えは自分自身や現場にあり、それをどうやって見出していくのかという「学びを深める」という過程が、「楽しい」と実感することができ、非常に有意義な2年間でした。今後も子ども達や先生方と「学びを深め」、たくさんの「楽しい」をつくっていきたいと思います。

教職大学院 これまでの学び

令和5年度修了生 修了報告書

令和5年度修了生（7期生）の修了報告書題名です。右記QRコードから新潟大学教職大学院年報に進んでいただければ、これまでの修了生の修了報告書の「概略版」が掲載されています。



https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/?page_id=1973

大川原 浩将	公立中高一貫教育校における生徒の進路意識の形成に関する研究
尾崎 帝士郎	中学校数学科の授業における生徒の主体的な学びに関する実践研究 ～「数学のよさ」、「数学の面白さ」に着目して～
木村 卯乃	小学校国語科の授業における児童の対話的学びを促す授業実践
熊田 さくら	知的障害特別支援学校における運動の楽しさを追求した体育授業の実践 —高田の楽しさの4原則に着目した工夫—
倉田 彩子	自己を分析的に振り返るための実践的視点の研究 自己理解を基盤としたセルフ・アドボカシー・スキルの獲得を目指して
五井 虎之介	中学校社会科における生徒が主体的に学ぶ授業づくり
豊田 頌	インクルーシブ教育に向けた中学校での個別最適な指導による学習と社会的スキルの育成 —通常学級英語科でのUDL、校内適応指導教室でのJP学習、特別支援学級でのSST—
中澤 啓介	数学的問題解決におけるメタ認知的活動を促す学習支援
中山 尚人	運動が苦手な児童の運動有能感を高める授業づくり ～器械運動「鉄棒運動」「マット運動」の実践から～
船戸 祐英	社会を多角的に捉え、考察する力を育む授業実践
松井 佳奈子	「自分見つめ」を設定した小学校での教育活動と児童の自尊感情の高まり
井上 美恵	協働性ある集団ですすむ建設的な対話のある校内研修の組織化
岡村 芳倫	学校のチーム力を高めるための実践的研究 ～対話的な職員集団の形成を目指した職員研修～
牛藤 昌克	不登校の課題早期発見対応の効率を高める小学校での教育相談体制の構築 プロアクティブなリスク把握と校内支援スペースの活用を通して
堀 里也	保健体育科授業および学校保健活動を組み合わせた睡眠教育の取組が中学生の生活の質向上に及ぼす効果

特集 特色ある教育活動

選択授業 グローバル教育実践演習

新潟大学教職大学院では、中国の北京師範大学珠海分校、南奥実験学校との交流を、教職大学院開設時より行っています。COVID-19の広がりや令和2年度・3年度と、この授業の開講はできませんでしたが、令和4年度より再開しています。

令和4年度は、韓国のソウル教育大学校に赴き、大学院生と研究会を開催しました。令和5年度は、北京師範大学珠海分校大学院生と研究会を、また南奥実験学校の子どもたちに、新潟大学教職大学院生が授業をさせていただきました。海外の学校の海外の子どもたちに授業をするという、滅多に経験できない学びの場となっています。異なる国の教育活動や環境に触れることで、院生にとっては、日本の教育を再認識したり、視野を広げたりする絶好の機会となっています。



◁ 研究会



△ 授業の様子



◁ 学校施設視察



社会は、多様性が求められ、グローバル化や情報化が加速的に進んでいます。一方で、人口減に伴う子どもの減少や格差社会の広がり、教職員のなり手不足と、課題も山積しています。子どもたちが、この変化の激しい社会の中で、未来を創造する人となるための教育の在り方について、皆様と一緒に考えていきたいと思っております。

今年度もレイアウト・デザインを委託先の(株)Shitamichi HDに勤務する本学大学院修了生 川口かおりさんがご担当くださいました。(文責 酒井悟)

新潟大学教職大学院 News Letter 「協創」 第14号 2024.10.28 発行 編集・発行 新潟大学大学院教育実践学術研究科(教職大学院)広報委員会
〒950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐二の町8050 問い合わせ先・kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp
ホームページ URL:<https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/> ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。



<https://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/>